

## 【人物から学ぶ歴史】

### 昭和天皇の師・天下の至宝 杉浦重剛

昭和天皇は名君中の名君だったと私は思っている。明治天皇も名君であらせられた。この時代は、国家の運命を委ね得る一級の人物たる多くの忠臣に恵まれておられた。それは歴史上明白な事実であろう。しかし昭和天皇が即位されてからの時代は多くの一級の人物はこの世を去り、国家の舵取りを担うに足る忠臣に昭和天皇は恵まれてはおられなかった。この様な時代背景の中で、陛下は孤独な「昭和という時代」を必死に生きぬかれた、と私は感じてきた。

五・一五事件、二・二六事件、張作霖爆殺事件、満州事件,,,,, と軍部の暴走に苦慮されながらも、戦前は議会制国家制度を厳守され、大東亜戦争決定の御前会議でも自らの反対の意見を歌にお示しになりながらも「**独裁政治に陥らぬ為**」開戦の承認をされ、議会制政治の制度を守られた。さぞご不満であらせられたとお察しするところである。

注) 日米開戦の御前会議で詠まれた和歌

「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」。明治天皇が日露戦争開戦時に詠まれた和歌を引用された。はらからとは兄弟の意。

日本国家の政治制度をお破りになったのは全閣僚の要請による御前会議での終戦の決断のみであった。陛下はお若き頃、議会での決定事項に不満の意を口に出され、木戸公から強く戒められた御体験から議会制国家を強く意識し、議会での決議事項には口出しされぬようになったと聞き及んでいる。

注) 木戸公

木戸幸一。昭和天皇の側近の一人として東條英機を内閣総理大臣に推薦するなど、太平洋戦争前後の政治に関与した。敗戦後に GHQ によって戦争犯罪容疑で逮捕され、極東国際軍事裁判において終身刑の A 級戦犯となったが後に仮釈放された。維新の三傑の一人木戸孝允（桂小五郎）の孫。

特筆すべきは二・二六事件や終戦時、または終戦後のマッカーサーとの御会見等、昭和天皇の危機解決に対しての御判断・御覚悟・御決断の「速さ」・「凄さ」を發揮されたことである。昭和天皇はマッカーサーに「戦争の全責任は自分に

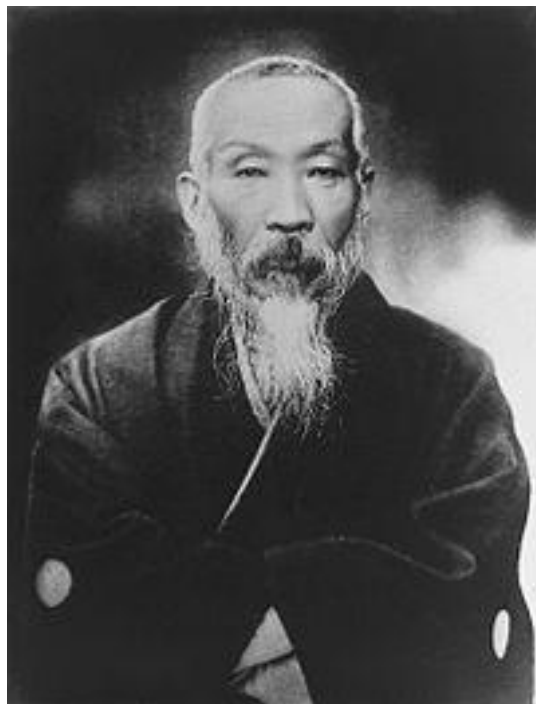
在る。自分の身は如何ようになろうともかまわぬが、国民の飢えを救ってくれるように」。……と頭を下げられた。命乞いに来たと思っていたマッカーサーは、この威厳ある態度に感銘を受け、昭和天皇に対する考えを一変させられたと述べている。この様な名君に昭和天皇をお育てしたのは如何なる人物なのであるか？



昭和天皇とマッカーサー

我々は御学問所総裁の東郷平八郎元帥や学習院長の乃木希典大将ぐらいは承知しているが、昭和天皇の御天性を目覚めさせ、戦後無私的行為を続けられた名君の魂を育てたのは誰なのか？ 多くの人は知るまい。それは民間人の教育者、杉浦重武（しげたけ）その人であった。

将来、天皇の御位（みくらい）につかれる日嗣（ひつき）の皇子（皇子）に倫理を御進講する人こそ、人格・識見ともに卓越した人物でなければならないのは当然であろう。杉浦こそは「帝王の師」として不足のない人物であったと評価されている。



杉浦重剛

### ＜倫理を御進講の担当者として選ばれた経緯＞

大正三年皇太子殿下は学習院初等科（院長は乃木希典）を御卒業。この後新たに設立される東宮御学問所（総裁は東郷平八郎元帥）で御勉強されることになり、将来の帝王の師傅（しふ）たるべき倫理御進講の担当者を誰にするかが最大の問題であった。この担当者こそは国民の模範として万民から仰がれる人物でなくてはならなかった。

杉浦を推薦したのは東京帝大総長山川健次郎であった。山川は会津藩出身、即ち賊軍の子として艱難辛苦を重ねながら東大総長まで登りつめた人物で、世間では「フロックコートを着た乃木大将」と言われるような、古武士の風格を醸し出すような優れた人物であった。山川は御学問所の幹部から倫理を担当すべき人物を東大教授の中から求められた時、「恥ずかしいが、大学教授の中には一人も然るべき人はいない」と答えた。「それならば自分で引き受けられるより外あるまい」と言われると「いよいよその人が居ないなら自分が引き受けるが、民間の唯一人、最適任者がいる」といって、杉浦を推薦したのである。何よりも杉浦の人物と和漢洋にわたる深く広い学問とその識見が評価されたのである。この人選は天下を驚かした。杉浦は無位無冠の一民間人にすぎず、とてもこの様な大役に任ぜられるべき人物とは思われていなかったからだ。

こうして杉浦は「帝王の師」となった。天が杉浦に下した大任であった。杉浦は恐懼(きょうく)しつつ謹んでこれを引き受けた。この時次の歌を詠んでいる。「数ならぬ身にしあれども今日よりは、我身にあらぬ我身とぞ思ふ」杉浦は御進講に臨んで靖国神社に参り、御進講草案を神前に供し、黙禱祈念した。また心から尊敬した乃木と小村寿太郎の墓を詣でた。御進講は週2時間7年間続いた。杉浦は一日たりとも休まず、全身全霊を捧げて御進講にうちこんだのである。その御進講の内容は今日「倫理御進講草案」として残されている。



倫理御進講草案

杉浦は大正三年から十年迄、昭和天皇の皇太子時代、十三歳から十九歳の間、東宮御所学問所に於いて倫理を御進講した人物であったが、あわせて皇太子妃となられる久邇宮良子(くにのみやながこ)女王殿下(後に、香淳皇后)へも、大正七年から十二年まで御進講した。杉浦は約十年間この重大なる任務に精魂を込め、心血を注ぎ、勤め上げたのである。そして翌十三年、心身を燃え尽す如く亡くなっている。

### <杉浦重剛(しげたけ)の略歴>

彼は安政二年(1885年)近江国膳所(ぜぜ)藩士の家に生まれ、数え六歳で藩校に入り、早くより頭角を現した。明治三年十六歳の時、藩の貢進生として上京、前年に設立された大学南校(後の東京帝国大学)に入学した。この制度は政府が各藩に命じて学力品行の優秀な者を大学南校で学ばせ、将来国家の双肩を

担う人物を育てる為の画期的なものであった。全国二百五十余藩から二百余名の秀才が集まったが、その中で双璧といわれたのが杉浦と小村寿太郎であった。小村は日向飴肥藩（おびはん）の出身で、小村を外務省に推薦したのが杉浦であり、小村の父親の莫大な負債を返す為に苦慮していた小村に、同志に働きかけ援助したのも杉浦であった。

杉浦はここで六年間化学を学んだ。大学南校が開成学校となった式典では明治天皇の御前にて実験を行う程、優秀であった。明治九年、二十二才の時、イギリスに4年間留学し、化学を学び、最良の成績を残したが、一流の学者になる道を病氣療養のため断念、病後大学予備門（後の第一高等学校）長となり、教育者の道を歩むことになる。明治十八年予備門長をやめ、同年同志と共に東京英語学校を創立（後に日本中学になる）、四十年間教育活動に専念する。

彼は教育者であると共に志は常に国家に在り、鹿鳴館全盛の欧化主義に走り過ぎ、自国の伝統・文化の美点を軽んじる当時の風潮を厳しく批判した。杉浦は明治二十一年、雑誌「日本人」、二十二年には新聞「日本」の創立にあずかり、当時の社会への警告を行い続けた。明治天皇が教育勅語を下されたのも、この様な世相を深く憂（うれ）えられた結果であったのである。

かくの如く育英に、国事に奔走する日々を送ったが、杉浦にとって最も辛苦の時代は四十八才から五十五才まで七年間の病床生活であった。原因不明の強度の神経衰弱だった。杉浦の人並みはずれた国事に対する憂念のもたらしたものであり、何度も死に瀕した。この間の貧苦は耐えられぬものであったが、苦難の末これを克服し、やがて「運命の日」＝「倫理御進講の大任の日」を迎えるのである。

次回に続く

# 近 代 史

## <5・15 事件>

大正末期から昭和初期にかけては**金解禁**と**世界恐慌**による経済不況の中、国民の生活は窮乏を極めていた。一方財閥はドルの売買で莫大な利益をあげ、政党はそんな財閥と手を結び「格差社会」と「金権・腐敗政治」が増長し、国民は資本主義社会に対する不満を募らせ、各界に「社会主義」思想が思想家によって民間にも軍部にも浸透し、国家改造の為の気運が高まった。

軍部ではクーデターの思いが青年将校の間に広がっていた。一般社会でも昭和4年は失業者が30万人にもものぼっていた。「娘の身売り」も急増した。政界では、「政友会」は三井財閥、「民政党」は三菱財閥をスポンサーに金権政治が蔓延し、汚職が横行した。

多くの人がこの原因は「自由主義経済」であり「階級」が生まれ格差が生じている……との考えからマルクス主義に傾倒する者が出てきた。ロシア革命以来この思想は全世界に広がっていた。日本では左・右に関係なくこの思想は広がりを見せ資本家・経営者と労働者を二分する「階級社会」思想から、資本家が労働者から搾取するのは「けしからん」とする思いに共鳴する過激な思想の人達から「血盟団」が生まれ「一人一殺・一殺多生」を主張し、連続テロ事件「血盟団事件」を起こす。「血盟団」の中心人物は日蓮宗の僧侶「井上日召」で、唱えたのはお経では無く「一殺多生」であった。この時井上準之助大蔵相と三井財閥統帥の団琢磨が暗殺された。同年5月15日海軍中尉古賀清志等4名の海軍青年将校、5名の陸軍士官候補生が首相官邸に乱入、犬養首相の「話せば分かる」に対し「問答無用」とばかり拳銃を発砲した。



5.15 事件を伝える当時の新聞

「統帥権干犯」を持ち出し浜口内閣を叩き、満州事変で若槻礼次郎内閣の「不拡大方針」を叩き、陸軍の味方であった犬養首相を、自分達の理想とする政府を作る目的の為だけに殺したのである。彼等は只破壊するのみで、何のビジョンも無かった。

大川周明が精神的支えとなっていたようだが、単に「革命への憧れ」のみだった。それでも国民は犯人達に対する「減刑嘆願運動」が巻き起こったのは政党政治の腐敗に対する反感が強かったからである。それ故、軍法会議で裁く側にも「彼等は私利私欲の為に事件を起こしたのではない」との思いから、犬養を撃つた三上卓中尉でも主犯の古賀も禁錮 15 年と軽いものであった。

大切なことは 5・15 事件後、日本の議会は多数をとった政党勢力から総理大臣が選ばれるという政党政治の仕組みは終戦まで行われなくなった事である。

ただの破壊行動に終わった 5・15 事件であったが、一気に軍国主義が加速し 2・26 事件、そして大東亜戦争に進んで行く。その中心である軍隊は一致団結どころか、内部抗争から日本最大の 2・26 事件というクーデターが生じるのである。

2・26 事件は次の勉強会で共に学びたい。

平成 28 年 4 月 24 日

志雲会塾長 有馬正能